

学 会 記 事

第43回新潟造血器腫瘍研究会

日 時 平成13年 4 月 6 日 (金)

18:00～

会 場 新潟大学医学部

有任記念館 2階

I. 一 般 演 題

1) 当科における急性骨髄性白血病の治療成績

永井 孝一・鈴木 訓充 (県立中央病院)
阿部 惇・村川 英三 (内科)
関谷 政雄・酒井 剛 (同 病理検査科)

【目的】成人急性骨髄性白血病の自験例を解析し、今後の治療戦略を考える。

【対象及び方法】新潟県立中央病院内科にて、1998年1月より2000年12月までに入院加療を施行した成人急性骨髄性白血病81例を対象とした。年齢は、17才～88才(中央値61才)で、男性49例、女性32例であった。FAB分類別では、M0; 4例, M1; 18例, M2; 27例, M3; 10例, M4; 13例, M5; 3例, M6; 6例であった。全身状態が不良のために化学療法の未施行例や、治療開始後の早期死亡にて治療評価の不能例を除く69例に単剤から多剤併用化学療法を施行し、治療成績を解析した。生存率の解析には、カプランマイヤー法を使用した。

【結果】全81例のカプランマイヤー法による5年生存率は、14%で、50%生存期間は早期死亡例が多いことより、約10ヶ月であった。69例中46例(66.7%)が完全寛解し、予後は非寛解例に比し良好であった。年齢別では、60才未満の34例中25例(73.5%), 60才以上の35例中21例(60%)に寛解を得、60才未満の症例の予後は60才以上に比し良好であった。FAB分類別では、M2(75.8%), M3(77.8%), M6(100%)の寛解率が良好であったが、予後としてはM2が最も良好で、M0及びM5は、寛解率、予後ともに不良であった。治療法別では、BHAC-DMP療法26例中21例(80.8%), DCMP療法6例中5例(83.3%), IDA+AraC療法15例

中13例(86.6%)と多剤併用療法の寛解率が良好で、BHAC-DMP療法とDCMP療法の予後が良好であった。M3に対するATRA療法の寛解率は50%で、AraC少量療法では16例中5例(31.3%)の寛解のみであった。

【考察】多剤併用療法による完全寛解例の予後が良好で、全身状態が許せば多剤併用療法による完全寛解を目指す治療が必要と考えられた。今後の課題として、高齢者及び予後不良病型の克服が必要で、近年多用しているIDA+AraC療法は、高齢者にも比較的安全に寛解が得られ、有用な治療法と考えられた。

2) 慢性骨髄性白血病の治療におけるインターフェロン α の効果—STI571の導入を目前にして、インターフェロン α の意義について考える

藤原 正博・曾我 謙臣 (長岡赤十字病院)
小池 正・黒川 和泉 (内科(血液科))

インターフェロン α (IFN α) は CML の治療薬として重要な地位を占めていることは確かだが、長期投与に伴う種々の副作用が知られており、また自己注射は患者にとってはかなりの負担となる。今回当院での治療成績をまとめることで、CMLにおけるIFN α の意義について考えてみた。

【対象】平成4年7月から12年7月までの間に当院でCML慢性期と診断され、IFN α 単独で治療を開始した13症例のうち、骨髄移植を受けた1例と2か月ほどで他院へ転院した1例を除いた11例を対象とした。2例は副作用や効果不十分のため、2週間および2か月で中止。3例は無効のため途中からHydroxyurea (HU) を併用した。残り6例はIFN α 単独治療を継続した。

【結果】①IFN α にHUを併用した例では、血液学的寛解にはなったものの細胞遺伝学的効果は得られなかった。②IFN α の効果が不十分な例は、治療開始時の血小板数が多い傾向がみられた。③IFN α 有効例はほぼ2か月以内に血液学的寛解状態となり、6例中5例で細胞遺伝学的CCRが得られた。CCRに到達するまでの期間は6～48か月とかなりばらつきがあった。

【考察】IFN α は細胞遺伝学的効果が得られてこそ有用な薬剤なので、治療にあたってはまずIFN α 単独で開始し、血液学的効果が得られるようならそのまま継続して細胞遺伝学的CCRをめざすのがよいと思われる。血液学的効果が得られない場合には、患者のQOLを

考慮して IFN α は中止し, HU などにかきかえる方がよいのではないと思われる。

3) 同種骨髄移植後に, リンパ節で再発した CML の T リンパ芽球性急性転化

岡塚貴世・鳥羽 健
青木 定夫・新国 淳 (新 潟 大 学)
土山準一郎・瀧澤 淳 (第一内科)
相澤 義房 (同 皮膚科)
河井 一浩 (県立中央病院)
永井 孝一・鈴木 訓充 (内科)

症例は47歳の男性。慢性骨髄性白血病慢性期の診断で Interferon α , Hydroxyurea にて治療したが細胞遺伝学的寛解は得られなかった。17ヶ月の経過の後, 左頸部リンパ節腫脹を呈し, 生検にて T 細胞性髄外急性転化と診断した。CHOP 療法を行い縮小傾向得られたが, リンパ節の残存を認め, 放射線療法を追加し画像上リンパ節は消失した。2000年7月, 非血縁者間同種骨髄移植を施行し良好に経過したが, 移植後80日目に右頸部リンパ節腫脹を認めた。生検を行ったところ, Ig の JH および TCR C β / δ / γ 鎖の再構成バンドを認めなかったが, CD 2/CD 5/CD 7/CD 33 および細胞内 CD 3 が陽性で, TdT を発現し, FISH で bcr-abl 融合遺伝子を認め, CML 由来の T 細胞性髄外急性転化による再発と診断し, 放射線療法を開始した。この間, T 細胞性急性転化後1年以上にわたり, 骨髄でのリンパ芽球の増生は認められなかった。

慢性骨髄性白血病の急性転化は約70%が骨髄性で, 30%がリンパ性とされそのほとんどが B 細胞性であり, T 細胞性は非常に稀とされる。

T 細胞性急性転化はリンパ節に発症する事が多く, 骨髄は慢性期を維持する症例が多いと報告されている。本症例では患者とドナーの性染色体の違いを利用して, クローンの正確な評価ができた。

4) 同種骨髄移植を行った FLT3 遺伝子 internal tandem duplication 陽性 AML (M2) の小児例

小川 淳・片岡 哲 (県立がんセンター)
浅見 恵子 (新潟病院小児科)

【症例】9歳の男児。1997年10月下肢痛で発症した AML (M2), 末梢血 WBC 26900/ μ l (blast 60%)。

骨髄に t (8 ; 21) 転座と, ML1-MTG 8 mRNA の発現と FLT3 遺伝子 exon11 に tandem duplication を認めた。左眼窩, L2 から S3 の脊椎管内に腫瘤を認め膀胱直腸障害を呈した。CCLSG ANLL 9411 pilot プロトコールで治療した。1クール終了後の骨髄に blast が 5.8% (FISH 54%) 残存していた。2クール終了後完全寛解した (blast 1.2%, FISH 0.7%)。腫瘤性病変も消失した。4クールの強化療法後の1998年5月に TBI 12 Gy, Ara-C 3 g/m² × 4, VP-16 30 mg/kg × 2, CPM 60 mg/kg × 2 を前処置として HLA 一致の弟より同種骨髄移植を施行した。GVHD 予防は MTX 単独で行った。day +28 日の骨髄で AML1-MTG 8 mRNA (RT-PCR 法) の消失を認めた。合併症として Grade III (皮膚2, 肝3, 消化管3) の aGVHD を認め mPSL 大量療法と CYA の投与を行った。肝障害は遷延し1999年3月に軽快した。また1999年1月気道感染後に呼吸困難, SaO₂ と1秒率の低下が出現した。胸部 CT より bronchiolitis obliterans が疑われたが気管支拡張剤, EM の投与に反応して改善を見ている。

【考案】CCLSG に登録された AML 症例のうち86例に対して FLT3 TD の解析を行ない5例が陽性だった。本例を除く4例のうち2例が再発死亡しており残りの2例は初回寛解導入不能であった。1例は死亡, 1例は寛解導入不能の状態で母親より同種骨髄移植を施行して現在も寛解生存中である。よって予後不良な FLT3 TD 陽性 AML に対して積極的に造血幹細胞移植を行うことにより予後が改善される可能性が示唆された。

5) 血球貪食症候群を合併した B 細胞性悪性リンパ腫の1例

滝沢 陽子・野本 優二
野本 規絵・高井 和江 (新潟市民病院)
真田 雅好 (内科)

【症例】73歳女性。2000年2月より寝汗が出現。3月27日発熱, 肝機能異常が続くため近医に入院, 抗生剤にて微熱傾向となり4月26日退院した。4月28日再び発熱を認め同院に再入院となった。不明熱, 肝機能異常, 血小板減少が続くため5月2日当院に紹介, 入院となった。

入院時肝脾2横指触知, リンパ節は触知せず。DIC はなく, Plt は 4.3 万と減少, GOT, GPT に比し LDH は 9960 IU と上昇し, SiL-2 R 4890 U/m, フェリチン 1841 ng/ml も上昇を認めた。サイトカインは